岡山理科大学教育実践研究 第6号 pp.133-145(2022)

学校英語教育の質保証を支える教師教育の試み

ー映像教材を用いた英語探究の実践ー

奥西　有理・藤城　孝輔・西野　友一朗・竹野純一郎
岡山理科大学教育学部中等教育学科

１．序論

国際間の社会的経済的な相互依存性が高まっている現代社会において、外国語でのコミュニケーション能力を獲得することの重要性は、多くの人によって認識されるようになっている。特にSNSの広がりにより、誰もが世界の至るところから発信される情報を瞬時に入手できるだけでなく、自らも情報の主体的な発信者となることができ、獲得した外国語を役立てる場面は日本にいながらも容易に見つけることができる。文部科学省(2018, 2019)も、外国語によるコミュニケーション能力について、「これまでのように一部の業種や職種だけではなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定」されるとし、学校教育において児童生徒がその能力を十分向上することができるように具体的な改革が行われている。新学習指導要領（文部科学省,2018, 2019）において定められた具体的内容として、高校卒業時に習得しておくべき語彙数が3,000語程度から4,000語～5,000語程度へと引き上げられている。また、「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り・発表）」「書くこと」の4技能5領域にわたるスキルをバランスよく獲得することが提示され、4技能それぞれにおいて国際基準としてのCEFR（Common European Framework of Reference for Languages）を参考にして到達目標を設定することが求められている。そして、CEFRでA2以上のレベルに達する生徒を過半数にするという数値目標も設定されている(文部科学省, 2014）。日本の学校英語教育で看過されがちであった「書くこと」及び「話すこと」というアウトプット技能を生徒に身に付けさせるため、授業において複数のスキル領域を有機的に結びつける言語活動を展開することや、教師自身が高等学校だけではなく中学校でも授業を基本的に英語で行うことが求められるようになっている（文部科学省, 2018)。知識や情報の一方的伝達に終始するのではなく生徒のアウトプットを積極的に引き出していき、教師自身も自ら英語のアウトプットに努めるロールモデルであるという英語教師像が示されている。

今回の学習指導要領の改訂で以前にも増して重視されるようになったアウトプット技能の向上に関しては、中学校では外国語で自分自身の考えや気持ちなどを伝え合う対話的な活動を行わせることが提唱されているが（文部科学省, 2018）、高等学校においてはディベートやディスカッションといった活動を通して生徒の英語の発信能力を高めることが想定されており、「論理・表現Ⅰ・II・III」が新設された。４技能５領域を総合的に扱う科目として設定されている英語コミュニケーションⅠ・II・IIIに加えて英語発信力を高める科目として教授されるようになっている。このように、生徒の英語発信能力を高めるための手段が具体的に示され、教科用図書も学習指導要領改訂の趣旨に合った改定が行われて

いる。これに対応した教師の英語運用能力と英語指導力の育成は重要であり、教員養成段階から真摯に取り組まれるべき喫緊の課題であるといえよう。

教員養成課程における学びの全体像を表した「中・高等学校教員養成課程外国語（英語）コア・カリキュラム構造図」（東京学芸大学, 2017）では、英語教師に求められる英語能力について、国際的基準である CEFR の B2 レベルが提示されている。加えて授業実践との関係では、「生徒の理解の程度に応じて英語で授業ができる指導力を身に付ける」こと、そして「「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り・発表）」「書くこと」の 5 つの領域にわたる生徒の総合的なコミュニケーションの能力を育成するための授業の組み立て方及び指導・評価の基礎を身に付ける」ことが示されており、英語教員養成で期待される能力育成は多岐にわたりハードルも高い。英語教員養成課程において、どのようにして学生が自身の英語運用能力を高め、生徒のアウトプット技能を含む英語コミュニケーション能力を総合的に向上させていける英語指導力を身に付けていくことができるかについては、緻密な議論の展開と実践研究や実証研究の蓄積が待たれる。

中学校、高等学校の教育現場において CEFR B2 レベル[1]以上を取得している英語教師の割合については、文部科学省（2021a）による「英語教育実施状況調査」において調査されている。調査開始当初の平成 25 年度は中学校で 27.9%、高等学校で 52.7%だったのに対し、令和 3 年度には、中学校で 40.8%、高等学校で 74.9%となっており、着実な増加が見られる。この調査では生徒の高い英語力への影響要因について、データに基づく量的検討が行われており、「英語教師の英語力」及び「生徒の英語による言語活動時間」が、生徒の英語力の高さに影響を与える要素であったことが報告されている。「教師の英語使用割合」が高いほど「生徒の英語による言語活動時間」の割合も高くなっていたという（文部科学省, 2021a）。高い英語力を持つ教師が、自ら英語を用いながら生徒の活発な言語活動を引き出していくことが、生徒の英語力を向上させる鍵であることが示唆されている。

英語教員に必要な英語力や指導力の明確な目標が設定される中、これらの能力を教員養成課程においてどのように効果的に身に付けさせることができるかについては、養成機関にその一切が委ねられている。高等学校までに身に付けてきた英語学力を基盤として、優れた授業力を支える高度な英語運用能力を身に付けさせるためには、ゴール地点を見据えた専門的な英語教育が必要となってくるであろう。近年、大学英語教育は、一般的な教養英語を広く学ぶという営みから専門性や学習の目的に焦点化した ESP（English for Specific Purposes）教育へのシフトが見られるようになっている。例えば、理工系の学生であれば、一般英語を幅広く学び直すよりも英語で調査研究を行うために必要な理工系分野の語彙やライティングスキルの獲得に重点を置いた英語教育を展開していくといったやり方である（Anthony, 2018; 野口・深山・岡本, 2007）。学校教育現場で英語教育に携わることが近い将来予定されている学生に対する英語教育も、一般英語教育の営みに加えて、英語教師の授業実践で必要となるアウトプット技能の育成や、各技能を有機的に結び付けた言語活動の実践と関連した教育を、ESP 教育の発想で体系化し行っていくことも必要なのかもしれない。英語教師に必要な英語力を、検定試験の合否や英語資格の取得といった量的側面に留まらせることなく、英語指導力と絡めた質的側面からも検討し、英語教員養

[1] CEFR B2 レベルは英検準一級に相当する（文部科学省, 2011）。

成課程において段階的に育成していくことが望まれる。岡山理科大学教育学部中等教育学科の英語教員養成課程では、英語アウトプット技能の育成と深く関わる授業実践を行っているが、本論ではその中の一つである「英語探究 I」を取り上げ、その趣旨や授業実践内容について報告する。その上で、その効果について教員指導力育成との関わりの観点から考察する。

２．映像教材を用いた授業実践「英語探究 I」

２－１　授業目的と到達目標

「英語探究 I」は主に学部 1 年次を対象とした本学教育学部中等教育学科の専門科目である。2020 年度までは英語教育コースの必修科目であったが、2021 年度から入学時のコース選択（国語教育コース、英語教育コース、国際日本語教育コース）の撤廃に伴い、学科専門科目における選択科目の一つとなった。そのため必ずしも英語教員を目指す学生のみを対象とする科目ではなくなったものの、英語教員の英語でのコミュニケーション能力養成の出発点として位置づけられていることに変わりはない。日本語を母語とする専任教員が担当する英語探究 I および II を 1 年次で履修後、学生は英語探究 III～VI の履修を推奨される。英語探究 I および II はアカデミズムに軸足を置きつつ英語学習へのモチベーション形成に配慮した授業、英語探究 III～VI は英検（実用英語技能検定）や TOEIC（Test of English for International Communication）という検定試験対策に焦点化した授業であり、1 年次において英語学習の基盤を形成し 2 年次から検定試験対策を行うという設計となっている。これにより学部の 1 年次から 3 年次にわたる継続的な英語運用能力の育成が期待される。

2022 年度は映画学を専門とする第二著者が英語探究 I を担当することになり、英語圏の映画を題材とした授業実践を試みた。映画をはじめ外国語のメディアは、学習した外国語の受容スキルを使用できる身近な場面の一つであり、４技能の一つ、「聞く」技能を伸ばすことも期待できる。ところが、第 1 回講義で聞き取りを行ったところ、日本語吹き替えでしか洋画を見ないという学生が多数を占めていた。学生は日本語字幕つきの映画を見ることも「英語で映画を見る」体験として捉えており、娯楽として見る映画を英語音声、日本語字幕で見ることに抵抗を感じている。このことは、学校教育における英語学習を通して英語を「勉強」として捉える認識が学生の中に深く根づいており、余暇の時間に息抜きとして見る映画にあっても英語との接触を忌避する意識が働いていることを示唆するものだろう。

英語および英語の文化的背景への理解を深めるとともに、映画の視聴を通したリスニング、映画史に関する英語の文章のリーディング、英語レポートの執筆に必要なライティングという英語 4 技能の中の 3 技能と関連した英語コミュニケーション能力を高める機会を提供するため、本講義では以下の 3 点を達成目標に掲げた。

1) 映画の歴史をアメリカ文化史の中に位置づけて説明できる。
2) 映画の映像表現および言語表現を主体的に分析し、意味を見出すことができる。
3) 映画の鑑賞および関連資料の読解に自分の英語力を役立てることができる

達成目標の順番が示しているとおり、映画を通した英語圏の文化や映像分析を主とし、英語力はあくまで映画という内容を理解するためのツールとして位置づけた。このような内容中心の教授法において学習者は内容を学ぶ過程の中で英語を自然な形で身につけることが期待できる（白畑・冨田・村野・若林, 1999）。教授言語が日本語であるためイマージョン教育のようなより完全な形での内容中心教授法とは区別されるが、週ごとに課すリーディング課題や講義で見せるスライドを英語にすることにより、学生が英語を学習の対象として身構えることなく自然に接触できる場の形成を目指した。

２－２　授業概要

第１回講義で映画史の黎明期に制作されたサイレント短編映画を紹介したのち、第２回以降はサウンドの技術が開発される 1920 年代末から 2000 年代にかけての長編映画を７本取り上げ、作品を視聴する回と作品およびリーディング課題について意見を交換する回を交互に展開した。第１回から第５回までの講義ではショット、サウンド、色彩、アニメーションといった映画の技術的要素に焦点を当てた一方、第６回から第 11 回ではフィルム・ノワール、メロドラマ、恐怖映画という映画の諸ジャンル、第 12 回から第 15 回では映画が描く文化的多様性およびグローバリゼーションの問題を提起した。台詞やナレーションといった言語的側面以外の部分も映像メディアにおけるコミュニケーションの主要な要素であることへの気づきを促した上で、映画の内容、さらには映画に描かれる文化や社会へと段階的に学生の理解を深めていくことを意図していた。参考文献としては、英語圏の高校や大学学部生向けの映画学の教科書として広く使用されている *Film Art: An Introduction*（Bordwell, Thompson, & Smith, 2019）と *Film History: An Introduction*（Thompson, Bordwell, & Smith, 2021)を紹介した。

学生は偶数回の講義で作品を視聴した上で奇数回の講義までに作品に関する英語のリーディング課題を読んで、意見の交換に備える。奇数回の講義では作品の背景などの紹介を教員が講義形式で行い、リーディングや作品の内容に関して問いを投げかける。また、教員と学生間の応答にとどまらず、映像の一部を再び視聴してペアやグループでその映像を分析し、意味を見出す活動を行った。これらの応答は主に日本語で行われたが、前述のとおり講義スライドや課題のリーディングは英語であり、英語をまったく理解することなく授業に参加することは難しい。さらに学期末には講義で取り上げた７作の長編作品の中から学生が１作を選び、劇中の具体的なシーンを少なくとも１つ取り上げて詳しく論じ、授業で読んだ資料を参考文献として引用するというレポートを最終課題として課した。レポートにおいて学生が選択できる各トピックは表１のとおりである。

表１　映像分析とライティングに関連した最終課題一覧

課題１：『恐喝』（*Blackmail*）において、サウンドの技術がどのように使われているか、劇中のシーンの分析を通して示しなさい。 In what ways is sound important in *Blackmail*? Discuss through your analysis of a scene (or scenes) from the film.
課題２：『白雪姫』（*Snow White and the Seven Dwarfs*）において、色彩がどのように使われているか、劇中のシーンの分析を通して示しなさい。

In what ways is color important in *Snow White and the Seven Dwarfs*? Discuss through your analysis of a scene (or scenes) from the film.
課題３：『上海から来た女』（*The Lady from Shanghai*）はどのような点でフィルム・ノワールの特徴を有している（あるいは、いない）か？　劇中のシーンの分析を通して示しなさい。 To what degree, can *The Lady from Shanghai* be considered a film noir? Discuss through your analysis of a scene (or scenes) from the film.
課題４：『天が与え給うすべて』（*All That Heaven Allows*）において、主人公と周りの登場人物の関係はどのように映像で表現されているか？　劇中のシーンの分析を通して示しなさい。 How does *All That Heaven Allows* visualize the relationship between the protagonist and the other characters? Discuss through your analysis of a scene (or scenes) from the film.
課題５：『激突！』（*Duel*）は、どうやって観客に緊張や恐怖を作り出しているか？　劇中のシーンの分析を通して示しなさい。 How does *Duel* create tension and/or horror in the audience? Discuss through your analysis of a scene (or scenes) from the film.
課題６：『ストレンジャー・ザン・パラダイス』（*Stranger Than Paradise*）において、主人公がハンガリー出身であることは物語の中でどのような意味を持つか？　劇中のシーンの分析を通して示しなさい。 How is the protagonist's Hungarian origin significant in the narrative of *Stranger Than Paradise*? Discuss through your analysis of a scene (or scenes) from the film.
課題７：映画『神の子どもたちはみな踊る』（*All God's Children Can Dance*）は原作の短編小説「神の子どもたちはみな踊る」をどのように改変しているか？　それらの改変はどのような意味を持つか？　劇中のシーンの分析を通して示しなさい。 What changes does the film *All God's Children Can Dance* make to the short story it is based on? How are those changes significant? Discuss through your analysis of a scene (or scenes) from the film.

この講義では、多くの場面において学生が英語の使用を自主的に選択できる余地を与えた。これは英語使用を授業で強制されることへの不安や苦手意識といった学生の情意的側面の学習への影響に対する配慮である。学生は作品の視聴に先だって日本語字幕で見るか英語字幕で見るかを多数決で選択する。最終課題も日本語の場合は 1600 文字以上、英語の場合は 350 単語と長さに差をつけた上でどちらの言語で書くかを学生自身が選択する。また、学内のグローバルセンターが実施している英語母語話者との一対一の英語学習セッションである「English Teatime」の担当職員を招いてセッションの内容について紹介してもらい、最終課題のレポートを英語で書く際には母語話者による添削を受ける機会があることを伝えた。積極的に発言や探究心が求められるアクティブ・ラーニングを取り入れた授業であることはシラバスでも強調されており、学生は押しつけられることなくみずか

ら選択して英語を使用する機会を増やし、講義内容である映画について理解、発信するために手段として主体的に英語学習を行うことが推奨される。

２－３　授業実践報告

映画の視聴については、4 作品目までは日本語字幕での視聴を希望する学生が半数を越えていたものの、5 作品目以降からは英語字幕を希望する学生が上回った（表 2）。このような自主的な英語使用への転換は、英語音声で映画を見ることへの慣れや映像メディアにおける非言語的コミュニケーションの重要性についての理解の深まりを通して、英語での視聴に少しずつ自信をつけていった結果であると見られる。本学所定の授業評価アンケートの中でも「洋画を見るきっかけになった」という学生の感想が寄せられており、授業外でも英語に触れる機会を求める主体的な学習者としての姿勢に結びついたようである（付録）。

表 2　映像視聴を行った回ごとの学生の字幕言語の選択[2]

上映日 （すべて 2022 年）	04/22	05/13	05/20	06/03	07/01	07/15	07/29
日本語字幕	○	○	○	○			
英語字幕					○	○	○

最終課題のレポートは受講生 18 名のうち 15 名が提出し、文字数／単語数に差をつけたこともあってかそのうち 12 名が英語、3 名が日本語でレポートの作成に取り組んだ(図 1)。また、英語で書いた 12 名のうち 3 名が English Teatime を利用して母語話者の職員による英作文の添削指導を受けた。添削指導は対面で実施され、職員と英語でレポートの文章について相談しながら原稿を修正する作業を伴うため、4 技能すべてを用いた英語コミュニケーションの機会となる。いわば、学生は課題にかけられる時間と労力や現在の自分の英語力を考慮した上で、どの程度英語を使用するか自ら選択するかたちになった。

図1　最終課題で自主選択させた使用言語の割合（人数）

[2] 受講生から意見聴取の方法としては、目隠しをしたうえで挙手をして日本語字幕か英語字幕かを選ばせる方式を採用した。多数決をとる目的の挙手であったため、それぞれの回答数の記録はつけていない。

受講生が提出したレポートをここで紹介する（付録１参照）。レポート内容については、課題を提示した段階でリーディングを文献として引用をすることと具体的なシーンの分析を行うことを指示した。例として提示した学生のレポートは英語で書かれており、これは当該学生が使用言語（日本語か英語のどちらか）に英語を選択したためである。英文に関しては、レポート提出の前に本学グローバルセンターが主催している English Teatime を通して、ネイティブの英語母語話者より添削を受けている。レポートに見られる表現や表記は原文のままである。単なる印象批評ではなく、自分の見解を映像分析や文献で支持する記載が見られた。

> There was also the famous scene where she magically made the poisoned apple and becomes an old hag. In that scene, the bright red apple, which is later the key, object is emphasized and attracted, and by surrounding the evil stepmother with dark colors, the surrounding colors further enhanced the queen's wickedness and intensity.

また、文中で学生は文献を引用していたが、これはリーディングの課題として課した文献の一部である。

> According to "Animated Films", "The colour of each dwarf's costume goes some way to expressing his temperament" (James Clarke, *Animated Films* (2007), STYLISH TOONS p.39 l.19).

提出されたレポートの中には、付録１の例のようにアカデミック・ライティングの練習としての出題意図を先取りして "Introduction," "Main Subject" および "Conclusion"という見出しをつけ、学術的な文章構成を強く意識して書かれたと思われるものも見受けられた。

３．考察

視聴覚メディアである映画を外国語教育における副教材としてではなく、主たる教材として用いた教育実践は、学習者にその映画で使用されている言語の世界をバーチャルに接触させるだけではなく、現実世界の言語・文化理解へとつながる。「英語探究 I」の受講生は、学校教科用図書や受験用教材、ALT との日常会話のやりとりを通じてしか知らなかった英語コミュニケーションの世界を、映像と音声から成る創作の世界を通して拡げていくことができたと考えられる。

映画の視聴から得たビジュアル・音声情報を材料として分析的に思考し、単なる印象評価ではない英語の論理を意識したアウトプットが見られたことは、本授業実践の顕著な成果であった。英語のエッセイライティングは、本授業実践で行ったような説明がなければ、日本語でいうところのエッセイ、すなわち感想文や随筆と同等なものとして捉えられがちである。すると自分の気持ちや感想が前面に出てしまう日本語らしい英語文のアウトプットになりがちで、期待されている英語ライティングとの間に齟齬が生じてしまう。本授業

実践の受講生が英語と日本語との言語的な違いを踏まえた論証方法の違いについて理解し、英語アウトプットのプロトコルを意識したライティングを試みることができたことは、確かな英語指導力につながる英語力の基礎のトレーニングが行われたことを示唆している。

冒頭で述べた通り、新学習指導要領下で英語教師は、生徒のアウトプットを引き出すべくディベート指導等を積極的に行っていくことがなお一層期待されている。欧米文化にその基盤を置くディベートは、単に自分の想いや感想を巧みに伝えようとするだけでは不十分である。田村（2017）によると、ディベートは感情をわきに置いて一定のルールに基づいて厳密に行うべきもので、事実と証拠に基づいた論理的なやりとりをするという訓練が必要であるという。そしてその成果としては、思考が広がったり深まりするだけでなく、思考自体がはっきりしたり速くなったりすることもあるという。相手の反論を想定して考えることで、思考力と認識力を育むことができ、これにより合理的意思決定のコミュニケーションスキルが育つとされている。事実と証拠に基づき、分析的に考えて論理的に構成されたアウトプットに高い価値が付与されるということは、情緒的に物事を捉えて曖昧な発信をしがちな日本語話者にとっては理解しづらく、英語学習が進む中で意識的に身に付けていく必要がある。本論で取り上げた授業実践等の営みを通して繰り返し学習していくことで、母語文化に影響を受けた世界の認識（Whorf, 1956）から発想の転換が行われ、外国語での効果的な言語コミュニケーション能力の獲得が可能となっていくと思われる。

以上のように、高い英語指導力を持った英語教師育成のためには、まずは学習者として論理的表現力を身に付けるという課題がある。英語教師に求められる英語力についてはCEFR B2 レベル（英検準１級）以上という基準が文部科学省により示されており（文部科学省, 2021a）、この基準に到達することに向けた手厚い指導が日本全国の教員養成課程で行われている（伊藤, 2016）。しかしながら、論理的表現力を伴った英語力は検定試験の結果に必ずしも直接的に反映されるものではないため、教員養成課程において中心的課題として取り上げられることは少ない。論理的表現力を伴う英語力は、実際の英語コミュニケーションの現場で説得的なコミュニケーションを補強するものであるため、英語力の質保証につながることが期待できる。本授業実践は、グローバル社会において効果的な英語コミュニケーション能力の育成という理想に向けたユニークな取り組みであるといえる。

これ以外にも、英語教師が教育現場で英語を教える際に遭遇する課題については様々なものがある。林（2020）は、Horwitz（1996）を引用しつつ、「外国語不安（foreign language anxiety）」が英語の教科指導を難しくしていると述べている。外国語不安とは、外国語を学んだり使ったりする際に起こる不安や消極的な感情である（MacIntyre, 1999）。教える立場でありながら同時に学習者でもある英語教師は、この外国語不安を経験することになる。特にスピーキング指導においては、全てを予測した準備をすることは不可能であり、このことが英語教授に不安を感じさせる要因となるという（林, 2020）。

加えて林（2020）は、英語の教科指導においては、「母語話者至上主義」と「教師神話」というプレッシャーがあることを指摘している。前者は、英語母語話者に対して英語力が劣位にあるという認識、後者は、教師は何でも知っているべきで間違ってはいけないという認識である。これらの克服可能性について調査したところ、指導に必要な英語力に自信があり、自分の得意な授業スタイルを確立することができている場合にはハードルは克服され教科指導が有効に機能していたと報告されている。

本学の英語教員養成課程においても高い指導力を持つ教師の育成を目指し、教師教育を展開しているが、自らの英語力や英語指導力への不安から教師になることを断念してしまう学生も散見される。これは英語学習に伴う困難性の認知に関わる全国的な傾向と一致していると考えられる。外国語不安は誰にでも見られるユニバーサルな現象であり、これへの乗り越え方を心理面からサポートすることは、「学び続ける教師」（文部科学省, 2021b）の基礎を構築する営みであると考えられる。ノンネイティブ・スピーカーとしての自らの英語力についての限界と可能性、効果的な指導力についての捉え方や伸ばし方について的確な材料を提供し、不安を乗り越えることに役立つ認知方法を獲得させていくことが、教員養成段階において取り組まれるもう一つの課題であると思われる。

最後に、本実践研究の限界について記す。本実践研究は 2020 年度から内容を新設した 1 授業についてのみの報告であり、過年度の実績がないことから研究データとしての十分な積み上げはない。受講生も 20 名以下であり、事例的研究の域を出ない。今後より多くの学生を対象とした研究実績の積み上げと知見の一般化の試みが期待される。

参考文献

1) Anthony, L. *Introducing English for Specific Purposes*, 1st edition, Routledge. (2018)

2) Bordwell, D., Thompson, K. & Smith J. *Film art: An introduction*, 12th edition, McGraw-Hill Education. (2019)

3) Carroll, J.B. *Language, thought, and reality: Selected writings of Benjamin Lee Whorf.* The MIT Press. (1956)
（池上嘉彦（訳）言語・思考・現実　講談社学術文庫）（1993)

4) Clarke, J. *Animated films*, Virgin Books. (2007)

5) 林 彰子（2020）日本人英語教師の自信と自尊感情の関連についての考察—教科指導についての語りからの分析
言語文化教育研究 18, 123-141.

6) Horwitz, E. K. Even teachers get the blues: Recognizing and alleviating language teachers' feelings of foreign language anxiety. *Foreign Language Annals*, 29(3), 365-372. (1996)

7) 伊藤豊美 NDSU 英語教員養成 10 年の軌跡(2)本学英語教員養成プログラムの指導内容・指導方法　ノートルダム清心女子大学紀要 39(1), 87-104.（2016）

8) MacIntyre, P. D. Language anxiety: A review of the research for language teachers. In D. J. Young (Ed.). Affect in foreign language and second language learning: A practical guide to creating a low-anxiety classroom atmosphere. McGraw-Hill College. (1999)

9) 文部科学省外国語能力の向上に関する検討会（第 3 回）参考資料　英検における外部基準との関連（第 2 回検討会における財団法人日本英語検定協会配付資料より抜粋）
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/082/shiryo/ attach/1302536.htm（2022 年 10 月 20 日閲覧）（2011）

10) 文部科学省今後の英語教育の改善・充実方策について　報告　グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/1352460.htm（2022 年 8 月 24 日閲覧）（2014）

11) 文部科学省　中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　外国語編（2018）

12) 文部科学省　高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説　外国語編　英語編（2019）

13) 文部科学省令和 3 年度「英語教育実施状況調査」概要
https://www.mext.go.jp/content/20220516-mxt_kyoiku01-000022559_2.pdf（2022 年 10 月 12 日閲覧）(2021a)

14) 文部科学省「令和の日本型学校教育」を担う教師の学び（新たな姿の構想）
https://www.mext.go.jp/content/20210713-mxt_syoto02-000016589_6.pdf（2022 年 10 月 16 日閲覧）(2021b)

15) 野口ジュディー・深山晶子・岡本真由美　理系英語のライティング　アルク（2007）

16) 白畑知彦・冨田祐一・村野井仁・若林茂則　英語教育用語辞典　大修館書店（1999）

17) 田村洋一　ディベート道場—思考と対話の稽古　Evolving（2017）

18) Thompson, K. Bordwell, D. & Smith J. *Film history: An introduction*, 5th edition, McGraw-Hill Education. (2021)

19) 東京学芸大学文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成 28 年度報告書
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryo/__icsFiles/afieldfile/2017/12/08/1399160_06.pdf（2022 年 9 月 20 日閲覧）（2017）

付録１　受講生提出レポート例
Analysis of “snow White and the Seven Dwarfs”

<Introduction>

Nowadays, Disney movies are loved by many age groups, from small children to the elderly. Among them, Snow White and the seven dwarfs is especially colorful and loved by the world over like a picture book. From now on, I will analyze the ingenuity of the colors of the movie.

<Main subject>

Snow White and seven dwarfs was made in color in the 1937, a time when the films were mainly made in black and white, and attracted attention at that time. It is Disney’s first movie made in color. As mentioned in the introduction, it was very color-conscious, paying attention not only to the characters, but also to the background and the colors of the key props in the story.

First, looking at how each color of the characters was used each of the seven dwarfs were represented differently by the colors used. According to “Animated Films”, “The colour of each dwarf’s costume goes some way to expressing his temperament” (James Clarke, *Animated Films* (2007), STYLISH TOONS p.39 l.19). For example, the character Grumpy was often angry and emotional, so he wore red clothes, which is a provocative color. Also, while dwarfs used soft brown or understated colors because they had a soft and gentle behavior, the evil stepmother was expressed more coldly by illuminating the dark room with only candles and using many dark colors in her dress to give her a cold and scary impression. There was also the famous scene where she magically made the poisoned apple and becomes an old hag. In that scene, the bright red apple, which is later the key, object is emphasized and attracted, and by surrounding the evil stepmother with dark colors, the surrounding colors further enhanced the queen’s wickedness and intensity. Furthermore, in Snow White and Seven Dwarfs was painted not only in such colors but also the shadows on the character’s face.

They can be seen by expressing the round face and body shape of the dwarf depending on how the shadow is drown, and in the scene where Huntsman tries to kill Snow White, the artist studied how to cast shadows to create fear and tension.

<Conclusion>

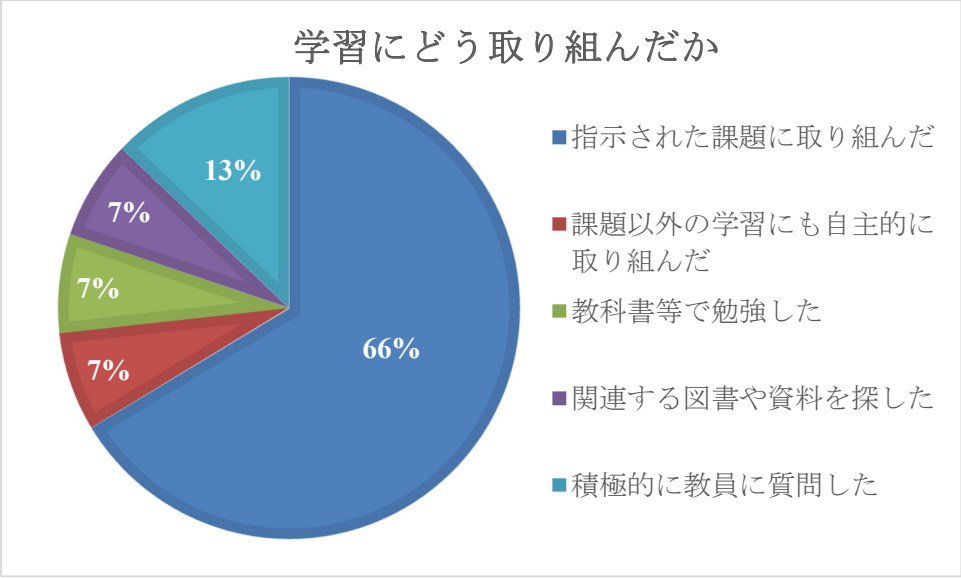
Snow White pays attention to diverse colors and shadows in order to draw people’s attention and entertain the viewer, and has features that can not be seen in other movies. So, I think it is a work that will be loved.

参考引用文献　James Clarke STYLISH TOONS『Animated Films』(2007)　39-42

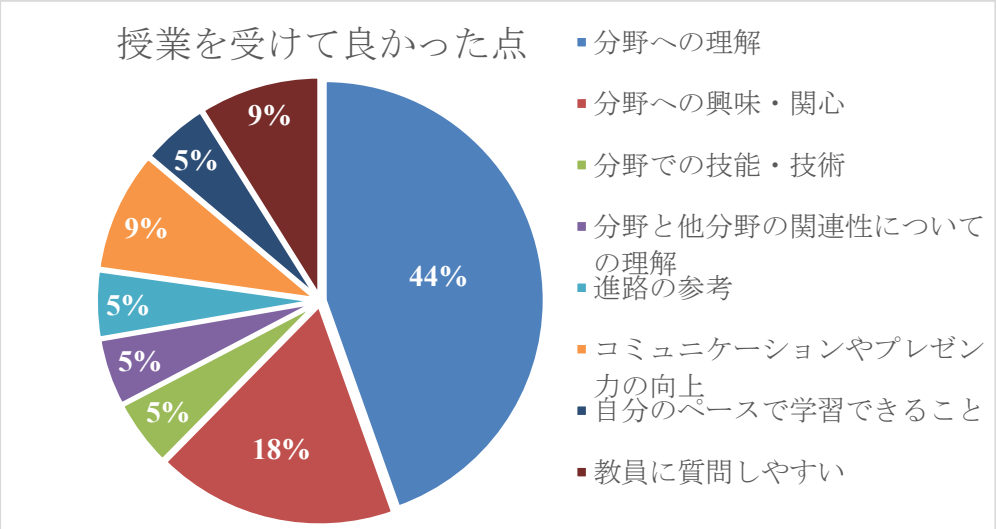
付録 2　2022 年度春学期「英語探究 I」授業評価アンケートの結果（一部抜粋）
（各項目の円グラフはアンケートの回答を基に作成）

・回答期間：2022/07/18(月) 00:00 ～2022/08/12(金) 23:59
・対象者数：18 名回答者数：10 名回答率：55.6%

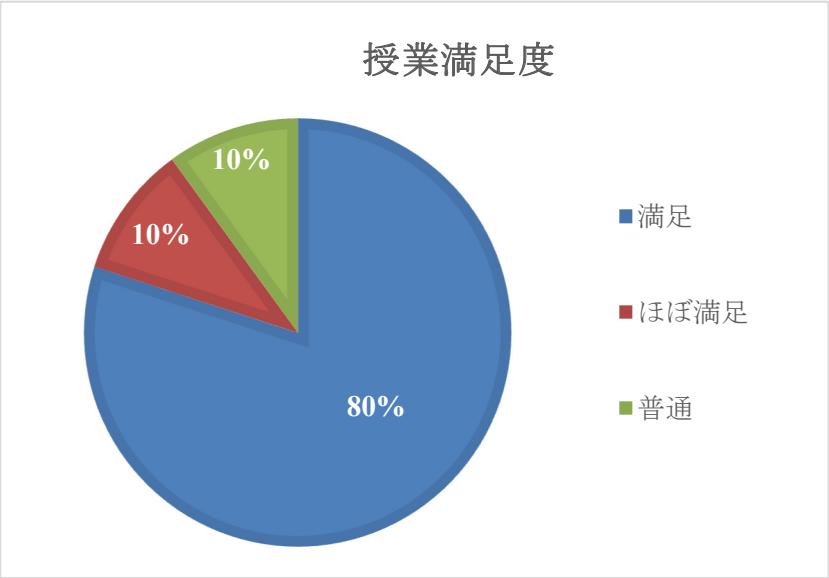
授業時間外の学習にどのように取り組みましたか。あてはまるものすべてを選んでください。



この授業を受けて良かった点は、何ですか。あてはまるものすべてを選んでください。



総合的に判断して、この授業に満足しましたか。１つ選んでください。



自由記述：授業を受けてよかったことや感想、回答への追加コメント、その他この授業に関して考慮してほしいことなど、自由に書いてください。

洋画を見るきっかけになった。